

秋 田 美 人 考

庭野 藪椿

1、 「秋田美人」

25 年ほど前、以前勤務していた会社で東京に長期出張していた時代、全国から集まっていた同僚達とよく飲む機会があった。ある時、同僚の一人が、ある月刊誌をもって（本の名前は失念したが・・・）その月の特集記事が「美人」に関する記事であった。その日の宴席の話題が「美人」に集中したことは言うまでもない。記事中の統計で諸々の要素、例えば①他県からの訪問者の印象②皮膚の白さの科学的統計③顔の輪郭に関するもの④化粧品の消費金額の統計・・・等、多岐にわたり秋田の女性が一位との結論を示していた。当時、結婚したばかりの私は当然話題の中心になり、妻のことを詮索され面映い思いをしたことを記憶している。その後、今は他界されたが、湯沢市の「美人博士」といわれた、秋田美人研究の第一人者、杉本先生と懇意にさせていただく機会を得ることができた。杉本先生（杉本元祐医学博士）は湯沢の雄勝中央病院に赴任後、後に湯沢で開業した医師であったが、秋田に暮らす女性の膚の白さに興味を持ち、科学的に分析された方である。杉本先生は岩手県の遠野出身で顕かに岩手の女性との差を感じたそうである。秋田美人研究に関してはもう一人忘れてならない人がいる。秋田大学にいらした、新野直吉先生である。新野先生は歴史が専門の先生で、歴史と関連させた美人研究者として有名な方である。お二人の先生の文献を参考に、私なりの「秋田美人」をご紹介したいと思う。

美人の定義は人夫々であろうが、ある一定の基準があることは間違いないものと思われる。そして、膚の白さもおおきな要素の一つであろう。美人に関しては色々な伝説？（風説？）があり、「富士山の見えるところに美人はいない」とか、「日本海飛び飛び伝説」はては「日本三大ブス地帯」まで有る。まず、「富士山の見えるところに美人はいない」説。富士山の見える所といえ、東京、千葉、神奈川、静岡、山梨あたりで美人県といわれる秋田、京都と比較すると気候の大きな差がある。年間日照時間だけをみても秋田が 1752.4 時間、京都は 1807.6 時間、対して東京は 2067.0 時間である。紫外線の量が秋田、京都はあきらかに少ない。また秋田、京都は気温の高低は激しいが湿度の変化は少ない。対して、東京などは気温、湿度ともに変化が大きく、紫外線も多くて皮膚に良くないといわれている。

2、 「日本海飛び飛び伝説」

そもそも私は「日本海飛び飛び伝説」なるものの存在を知らなかったのだが、それは結構広く云われていることらしい。引用すると「日本海側は『秋田美人』『越後美人』『加賀美人』『京美人』、ちょっと飛んで『出雲美人』『博多美人』と言うように一県ずつ飛び飛びに美人の県があるという説」なのだそうだ。つまり、この伝説を裏返すと、山形、富山、福井、兵庫、鳥取、山口には美人がいらないということだ。兵庫と鳥取が並んでいるのがいささか難だが、島根と鳥取の区別が付く人はあまりいない。この説には富山商船高専の教官をされている方が反論していて、いわく、富山美人は語感が悪い、越中美人と言い直しても、どこかゆるんでいるようではいけない、富山を代表するタレントが室井滋と柴田理恵というのもイメージを限定する、有力大学がないので旬の女性が流出してしまう、美人がいても絵になる背景がない、兼六園も三寧坂もない、黒部ダムではぶち壊しである、浄土真宗信仰のため、悪人正機説のごとく「ブス正機説」という居直りの態

度が生まれた、などなどそして、結論ともいえるのが「謙遜」説。この先生によれば、富山には美人がいないのではなく、富山美人と言う言葉がなかっただけなのだ。実に言語学者らしい結論である。その理由の最大のものが、自らの土地に「美人」などと思いがかった言葉をつけるのを恥じる、富山県民の謙遜という美德なのだと。そして、「謙遜は、日本人みんなが持っていた美德なのである。みんな忘れかかっているのを富山県民だけがずっと保っているのだ」。「それにしても、富山には美人がいっぱいだ。ただ、不幸なことに、僕が出会っていないだけだ」。実に謙遜に満ちた論の閉じ方である。さて、逆に美人がいない、という伝説の代表が「日本三大ブス地帯」である。これは伝えられる地域によって、少しずつ異なる地名があげられる。よく言われるのが、仙台、水戸、名古屋である。名古屋が熊本、広島、岡山、松本、前橋、福島、米沢などに置き換わっているバージョンを聞いたこともある。もともとの仙台、水戸、名古屋は、江戸幕府が潜在的敵対勢力と観ていた藩の所在地だったからだ、という説がよく唱えられているのだが、そもそも、幕府の仮想敵ナンバーワンであった薩摩藩が入っておらず、あそこはブスが多いと噂を流すことが、仮想敵国弱体化への有効な工作になるとも思えない。注目されるのは、なぜ美人が少ないのかと説明する理屈に、よく似た理由が持ち出されることだ。水戸の場合は、水戸徳川家が移封される前は外様の佐竹藩が治めており、改易されて頭にきた佐竹藩が美人をみんな秋田に連れて行った、とか、名古屋の場合は、尾張徳川家が将軍家に睨まれるたびに、名古屋の美女を献上したので、残りは皆ブスになってしまった、などといわれる。松本では、武田信玄がああ地を攻めたさい、美女を全部甲府に連れて行ったからという説もある。美人と言うのは、目立ったのを連れて行ったぐらいで、次世代以降も居なくなってしまうものなのだろうか、という疑問さえ無視すれば、「本来ならいたはずの美人が、何らかの事情、まして権力がらみで奪われてしまったのだ」という告発含みの言説と言うのは、不満を抑えるにはまことに機能的である。

3、「あのヒト」

そもそも、秋田美人なる言葉の発祥は、明治の終わりから昭和の初めにかけての、鉱山産業が華やかな頃、秋田を訪れた多くの文人達が、秋田の夜の繁華街、川反（かわばた）の芸者衆「川反芸者」を指して言ったのが始まりとされているようである。その後次第に一般的な表現となり、今では秋田の女性の代名詞になっている。秋田美人は色白で背が高く、瓜実型と丸型の中間でやや面長、目は細く切れ長、口は小さく、鼻筋が通っている。肌はキメ細かく、その色は白色人種に劣らない・・・などとされている。「詩人画家・竹久夢二」のモデルだった「お葉さん」も秋田の女性であった。出会いは大正8年「夢二・36歳」、「お葉・16歳」で、妻の「笠井彦乃」を大正9年に病気で亡くした翌年に所帯を持っている。「お葉さん」がモデルのお高祖頭巾・ポーズするお葉・うたた寝するお葉、などなどの作品には色白で面長、丸みのある細いほうを下にした卵形の、秋田美人の典型的な顔が描かれている。

昭和41年（1966年）の「文芸春秋・八月号」に「秋田美人を科学する」という杉本先生の文章が載っている。ちなみにこの文章は、大曲市立図書館で入手したものである。資料を調べに国会図書館に行った際、タイトルの検索では出てはきたが、コピーの依頼に「現物は有りません！」と言われた日くつきの資料で、たまたま、大曲市立図書館のホームページから検索したら見つかった、嬉しい資料である。杉本先生は、明治42年1月9日、岩手県遠野町で生まれ、お父様もお医者さまであったようである。東北大学の研究室から短期間の約束で昭和16年に現在の雄勝中央病院に赴任された。間もなく太平洋戦争に動員され、終戦と同時に復員となったが、大学に

戻れず、昭和 22 年 1 月、湯沢で開業し湯沢に定着することになる。杉本先生には、少年の頃から憧れの「あのヒト」が居たという。「あのヒト」とは自宅の大広間に飾られた、等身大で 120 号ほどの女性の裸体画である。4 年生の頃母親に「あの絵の人は一体、誰なの？」と聞いたことがあったという。母親は一瞬顔を曇らせてむっつりして、「お父さんが、どっかから譲り受けて、仕方なしに飾ってあるのだろう、よくない絵だね、あんなのは！」と答えたそうである。そして、ある日忽然と取り去られた。それから 5 年ほど経った中学 3 年の夏休みの或る日、偶然に予期しない場所で「あのヒト」と再会することになる。車庫の 2 階の物置で、古い大きな家具の間に埃まみれで、横たわっていた。『父の遠出の往診を狙って、ソッとその車庫の階段、というよりは普通の梯子を登るとき、私の胸は怪しくときめいた、私も、もうその頃には、裸婦のあのヒトを、一個の異性としてみる年齢、肉体に生育していた。薄暗くて汚い 2 階の小舎は、私とあのヒトとの逢瀬を楽しむ桃源郷になっていた。』と表現している。

4、「絵の謎」

昭和 39 年 4 月 24 日、この絵の謎が解けることになる。あるきっかけで、杉本先生の「子守り」をしてくれていた、67 歳の老女の訪問を 40 数年ぶりで受けたのである。『16 歳だったわたしの眼にこんな綺麗なヒトがいるものかと思われるほどでした。旦那様の大層なお気に入りのヒトだったようです。わざわざ東京から立派な絵かきさんを招いて、あの広いお部屋で 2 ヶ月近く、そのハダカの絵を描かせた旦那さん、あの無口でおやさしい旦那さんも、たいしたお方だったと思います。大変お金もつかわれたのでしょうかね。お茶を淹れたり、お食事を運ぶのが私の役目だったのです。私一人以外、一切誰もこのお部屋の出入りは禁じられておりました。ほかの人達は、ただ顔の絵を描かせているんだろうと思い込んでいたようです。—中略—旦那さんから部屋に入ったらずぐ鍵をかけるように申しつけられておりましたので、そのおいつけ通りにして、あのお部屋に入った時、私は腰を抜かささんばかりに吃驚してしまいました。あのヒトがスッパダカで絵かきさんの前にたっていたんですもの。絵かきさんは真剣なきびしい目つきで、でもやさしく、おとなしくしててちょうだいよ、と私にそうもうしたのです。そのうち私の気持ちも落ち着きましたが、あのヒトの白い肌の美しいのにも驚きました。雪肌というんでしょうね。—中略—私もあのヒトと仲良く話すようになりました。おひるの食事どきとか、お茶のときなどね。あのヒトは気だての優しいヒトでしたし、言葉もていねいでした。口調に岩手とちがう東北の訛りがあるので、私は、あなたの郷里は何処ですかと尋ねました。すると、おどろかないで下さいよ。あのヒトはね、クニは秋田のね、そう、ゆ、ゆのなんとか言いましたよ。ゆざわだったか、ゆぜだったか？とにかくゆの字のつく場所だったということだけは覚えています。』この絵の描かれた期間は、明治四十四年九月初旬から十月末までであったこと。あのヒトは雪が降りはじめてきた十一月の冷えた朝にさびしそうだったが、ニッコリ優しい笑顔を残して去っていたことなどを話してくれたのである。

5、「秋田女性の肌」

杉本先生は昭和三十年三月、日本医科大学解剖学教室の研究生となり、金子丑之助教授の指導の下、「秋田県人の毛髪、虹彩、皮膚色調測定」というテーマでの研究を始めた。秋田県特有の疾患（高血圧症、妊娠中毒症など）の研究とともに、健康体の全県に亘る高校三年生、男女ほぼ同数数千人を対象に顔面、体格、四肢の骨格などの計測も始めた。地味な長い年月の調査の結果、

「秋田県の若い女性は白く美しい艶のある皮膚をしていることが、全国的美人の水準をぬいている」という数字統計を発表した際、ある新聞が報道した。この報道の関連で、杉本先生の名前を見た老女からの連絡で、あのヒトの謎を解くキッカケになったようである。この報道以来杉本先生は「秋田美人研究者」の呼称を与えられた。『すくなくとも過去数年前までは、私の仕事の上からでも、また私の眼でみたところでも、秋田の人達、特に若い女のヒト達には、確かに美の要素が多分にあったといってよい。幼年期から長く私の臉の裏にやきついて離れなかった、あのヒトが持っているような美しさ、それは明治とか大正といった時代にもてはやされた日本女性としての、古典的な美しさ、というものを含めた要素ではあるが・・・。』と述べていた杉本先生は精力的に調査・研究を始めた。ここに具体的なデータがあるので示す。(表1)

使用した器具は比色計というもので、当時は「金子比色計」というものを使用したいが、どのような物かは資料が無い。現代の比色計は「光センサー」を使用しているが、当時は「プリズムカラーの色彩環」を使用していると記述されている。基礎色(色相)、純色(彩度)、白色、黒色の数値を測り、それぞれ平均値を出したものである。基礎色は1,0~24,0までの数字で表されており、基礎色が高いというのは多血性(赤血球数と血色素含有量の多いこと)を示し、それが低いというのは貧血性だということで、1,0は皮膚色調蒼白、11,0は紅潮であると記されている。測定個所は上腕内側(かいなの内側)で紫外線の影響は少ない場所である。数値は秋田県の場合は二十歳前後の男女、他は中年層を含む全ての男女健康体皮膚色調である。『特に、秋田県南地方の項を挿入したのは、角館、大曲、横手、湯沢を中心とし、昔から美人地帯(俗称)と呼ばれた地方であったから。秋田県の若い女性の肌色は、表1のように白さの比率は県南地方で30,50%と白色人種の40,50%に接近した数値を示している。個人別にみると、白人となんら変わりの無い白い肌の人が多いことは事実である。純色(彩度)はむしろ西欧人種のそれに勝っているというのは、色彩の豊かさであることも示している。』と先生は結論づけている。

6、「ビーナス」

昭和39年11月、杉本先生の住まいに近い湯沢北高等学校のバスケットボール部の生徒7名を対象に「ミロのビーナス」と比較・測定したカルテを作成した。この数値を(表2)に示す。対象者をAさんと呼ぶことにする。ミロのビーナスは、その容貌も肢体も、おそらく世界で一番美しい女性としての理想像であろう。この数値を分析して、杉本先生は次のように記述している。『このビーナスにくらべ、Aさんは成熟期に入ったばかりの少女であるから、胸、腹、腰囲のサイズはビーナスよりは小さいものであるが、この部分は将来かなりの変化(発達)が期待される。頭部の長さは、さすがにビーナスは短く、所謂八頭身を示し、Aさんは八頭身に近い七頭身というところ。鼻の長さと同唇の幅は、ほとんど同じ数値である。また両眼の内側の間隔も両者には大差なく、ともに広く離れている。これが美女に多い型とされている。鼻の高さになると、ビーナスとこれもごく僅差でビーナスが高い。Aさんの方が、ビーナスより優れていると思われるのは、やはり「眼」である。それは左右個々それぞれ丸く大きいこと。睫毛の長さ0,85というのは日本女性としては最長に属するものである。Aさんの皮膚色調の場合秋田県県南地方の平均白色含有量の30,50%をはるかに超えている。基礎色も高く、豊かな彩度も各部において顕著である。以上の数字からみてAさんは、私から言わしむると、日本女性としてはまさしく健康美女として最高級である、との賛辞を与えてもよいヒトである。お国自慢のようであるが、Aさん級の女性はこの地方にかなり多く見受けられるので、Aさんだけ、傑出しているヒトではないところに、この地方が昔から美人郷といわれるものがあるのだろうと私は思っている。』そして最後に

『秋田の美形については、郷土史家も、その他の学者諸氏も、私も、やはり混血（日本海岸へ漂流した漁場を追い求めた北方民族、またツングース族、アイヌ、そして先住民族、こうした民族の結びつき）が生んだ奇跡的美の産物であろうとも推察する。』と結んでいる。

7、「秋田犬の血液型」

混血説に関しては、新野直吉先生は次のような「白人混血説」をお持ちである。『大陸からの舟は偏西風と対馬海流の影響で、秋田に漂着することが多かった。奈良時代には、渤海国の使者が、能代に上陸したことが「続日本紀」に記されている。当時渡って来た大陸人はモンゴル人、ツングース系統の人種だったが、世界でも美人種といわれるコーカサス人種もいた。秋田美人は日本海を夢のかけ橋として結ばれた世界一の美人種との混血で生まれたのです。』コーカサスは中央アジアに位置する、現在のアゼルバイジャン、アルメニア、グルジアの3ヶ国周辺の地域である。この説を補完する幾つかの根拠を列記してみる。

- ① 日本列島の文化の伝播は西から東、南から北に進んだと一般的に言われているがこれは弥生時代以降の米作を基本にした見方である。しかし、それ以前の縄文時代を考えると、青森県の亀ヶ岡式土器文化という日本列島で最も進んだ文化を東北北部は持っていた。三内丸山遺跡などもこの時代である。考古学者の山内清男氏も『縄文文化の中心地域は、食料資源の豊富な中央以北の地で、遺跡の数はおよそ全体の五分の四に達し、文化遺産の発見もすこぶる多彩であり、縄文文化の本場と考えられている。これに反して、九州から畿内にかけての遺跡の数はおおむね五分の一程度で文物もふるわない。・・・・縄文人口はおおよそ30万人くらい、そのうち関西、九州の人口はようやく3万から5万ではないだろうか。この地帯に縄文式文物があまり多くないことは、よく知られていることである。』と述べている。
- ② 秋田犬の血液型についても注目すべき事実があるのだという。日本犬には柴犬、甲斐犬、紀州犬、土佐犬など古くからの種類があるが、同じ日本犬なのに、秋田犬と北海道犬は他の犬と血液型が違ふとの事である。一般の日本犬がアジア犬に共通のG型が多いのに対し、秋田犬と北海道犬はそのG型がなく、ヨーロッパ犬と共通のA型であるという。犬の血液型は輸血の為に抗原タイプを分類したDAE式という方式が世界標準になっているそうであるが、このA型、G型という分類は輸血を念頭においた分類ではない。「赤血球酸性糖脂質」という物質を分析した結果A型はアセチル型の脂質を持つもの、G型はグリコル型の脂質を持つものの総称である。日本犬の中で北方の秋田犬や北海道犬がA型でG型は殆どいないということであれば、これらの先祖がヨーロッパに起源する、ということと言えるかも知れない。犬は単独で渡って来ることは考えられず、家畜として人との関わりが特に深い事を考慮すれば、直接、間接かは別にして、深い結びつきが有ったことは十分に考えられる。
新野先生は他にも馬や、出土品などに関わる説を述べておられるが、ここでは省略する。

8、「日本人の血液型」

日本人の血液型の分布資料がある。日本人、450万人を調査した結果、平均はA型38.7%、O型29.2%、B型22.2%、そしてAB型が9.9%となっている。A型は九州北部、愛媛、鳥取に多く、東北に向かうにつれて減少する。B型は東北、北陸、中部地方に多く、西方に向かうに従い減少する。O型は九州南部、太平洋沿岸に多い。秋田県の分布はA型35%、O型31%、B型25%、青森県はA型32%、O型34%、B型25%であるのに対し、鹿児島県、A型42%、O型28%、B型20%、愛媛県はA型43%、O型26%、B型20%である。この差は明らかに有意

差であると思われる。このことより、日本列島には3つのルートで渡来した可能性が推測される。

- ① 初め太平洋諸島に住んでいた民族（O型の多い太平洋型）が南方から渡来した。
- ② 次いで北方から朝鮮半島を経てB型因子の民族が渡来した。
- ③ さらにA型因子の多い民族が九州の北部、中国、四国に分布し、次第に東方に進出してきた。

これまで記述した血液型は赤血球型のABO式の分類であるが、血液型には他の分類もあるようである。血清型、酵素型、白血球型とあり、その中でもさらに多彩な分類がある。他の方式で分類したもので纏めてみると、《アジア州民族》〔蒙古人型〕この型に属するものは蒙古族、満州族、ツングース族、ブリアート族、オロッコ族、漢民族、アフガニスタン住民、ソ連連邦内の蒙古族、ヨーロッパ州のジプシーなどである。〔インド人型〕この群に属する民族はインド人、ビルマ人、タイ人、インドシナ人である。〔南アジア人型〕これに属する民族はフィリッピン人、台湾高砂族の大部分、マレー半島原住民、ボルネオ住民、セレベス島民、スマトラ島民、小スンダ列島民およびマダガスカル島民、シナ人は南北で血液型の分布率に相違がある。北シナ人は蒙古人型であるが、南シナ人は南アジア型を示し、北部朝鮮人も蒙古人型である。ジャワ島民も南方型である。《西アジア＝東ヨーロッパ民族》〔日本人型〕これに属する民族は日本人の血液型頻度と同じ値を示す民族であって、日本人、ヨルダン人、ラトヴィア人、エストニア人、ポーランド人、ウクライナ人、ハンガリー人（蒙古系）及びエジプト人である。〔西アジア＝東ヨーロッパ人型〕血液型は前者とほぼ同じ頻度を示すが、日本人とはやや異なるところがある。アジア州では、ペルシャ人、イラク人、レバノン人、トルコ人、ヨーロッパ州では、ブルガリア人、ルーマニア人、ユーゴスラビア人、チェコスロバキア人、白ロシア人、リトアニア人、フィンランド人及びユダヤ人がこれに属する。（この他、ヨーロッパ型、地中海沿岸型、アフリカ型、アメリカ州民族型、大洋州＝オーストラリア民族型、特殊型などの分類があるが割愛する。）このように、日本人は蒙古族、漢民族、そして東南アジア諸国とは少し違ってむしろ東ヨーロッパの匂いが強い人種と言うことが出来る。この事は先に記述した杉本先生、新野先生の言と符号する部分が多い。先年、ハンガリーに行った時に日本人によく似た風貌の人達を、何度か見かけたことも偶然では無いのであろう。

9、「メール」

ここまで色々例を挙げて記述してきたが、研究者ではないので、学術的な結論は書くことは出来ない。秋田の女性は衆目一致して、綺麗な人が多いと言いたいだけである。これは秋田に生まれた男の願望かもしれないが……。しかし、東京に行って「秋田です」というと、「おー、秋田美人の……」と言われることが圧倒的に多い。これだけでも感謝しなければと思う。秋田美人は「美人種」と言われるコーカサスに源を發した美人であると、考えるだけでもロマンの世界を辿れるではありませんか？さて、この原稿を読んだKさんからこのようなメールをいただいたのでご紹介しましょう。

『さて、電車の中で「秋田美人考」拝読させていただきました。目に、10センチ以上も近づけてね。はじめは、エッ、なんで？ どうして美人について調べるの？ 目的が見えずに、戸惑いながら、この文章と、ご本人のお顔を思い浮かべながら読みました。たとえば、〇〇さんは、美人がお好きなんだろうか？ 〇〇さんは、美人に興味をもっているのだろうか？ ー、〇〇さんは、秋田美人のために、なんで、国会図書館までいくのだろうか？ そこまでするには、きっと、〇〇さんは、美人の研究者か？ いつから？ それにしても、会話の中には、美人だとか、ブスだとかの評価は全然出てこなかったような気がする！ とにかく、わたしは、〇〇さんが、この文章を書くに

至るまでの気持ちが解らなかったので、戸惑ってしまいましたようです。ところで、引用されてある文献の方々は、みな男性なんですね。そこで、少し納得しました。美人に興味があるのは、男性なんだな！と。美しいものに憧れるとか、ルーツを探ってみるとか、歴史的な根拠を見つけるとか、って、人のゆとりでしょうね。マジメになって、調べてみたりする喜びは、いいですね。趣味のようなものですか？この記事を読もうとする人は、どんな人なのでしょうね？わたしが、この記事の中で興味をもったのは、「あのヒト」のところですよ。幼少時の原体験が、少年にどんな影響を与えられ続けたか面白かったです。ただ、わたしには、秋田美人とはほど遠い、色の黒さを売り物にしているので、興味ありませんよ。むしろ、その逆で、内面からの美しさを追求しているのです。存在するものが、条件にはまって、整っていても、形相の悪いヒトも中にはいるでしょう？そっちの方からせめていったほうが面白いです。ということで、お粗末ですが、思いのままを・・・(原文〇以外まま)』うんうん！一々納得です。仰せの通り、男は美人（と云われるもの）に弱い。他人が美人！と言えればつい振り向いてしまう。そして何故だ！と思ってしまう。国会図書館も他の資料収集と、安くて美味しい食堂のついでに集めた資料です。そして、仰せの通り美人の文献を出している人も殆どが男性です。でも、美人の評価は段々違ってきています。ガングロ、山姥は最近こそすたれたものの、当時の若者はこぞって？評価していたように思います。色黒もマイナス要因ではありません。東南アジアの女性は、勿論色の白い女性はおりません。でも、綺麗な女性はたくさんおりました。私が現地で綺麗！と思った人は一つのことを一生懸命にやっている女性。そして、優しい気持ちを表面に出さず、つつましく接してくれている女性。やはり、心の満足度が美人を生むと考えられます。新野先生もある章でこのように記述しております。「近世秋田の豊かさは、基本的には、やはり米の豊かさにまず支えられていた。藩財政などでは、さらにそのうえに、鉱山資源の開発、秋田杉の生産などが、大きな意味を持っていた。極端ないい方をすれば、秋田の人々は、飽食暖衣の生活をしていたのである。現在まで伝統が残るように、十分に飲酒し、大らかに民謡を歌うという甘い生活をしていたのである。その生活心理は、当然面相にも反映し、豊かでまろやかな美貌を形成したのである。」ということでKさんへの回答の形で私なりの「秋田美人」の結論を申し上げます。1、「秋田美人」は明治の花柳界で生まれた言葉で、男性から見た、理想の女性像なのではなかったか？2、人によって美人の基準は勿論違います。何に魅力を感じるのか、人夫々です。(現代風に云えば、フェチという言葉が有ります。所謂、顔、胸、尻、脚等)3、しかし、統計的に実証されている肌の白さ、きめ細やかさは動かされない事実です。4、でも、内面から滲みでる美しさは否定出来ません。色が白くても心の貧しい女性は、綺麗には見えません。読んで下さった、貴女、十分に「秋田美人」の血を引き継いでおります。そして、貴方、「奥さん」も「お嬢さんも」秋田美人の候補者です。素養は有るのでから壊さないで、益々「美人の郷」の名を高めるようにしたいですね。

※参考文献	「文芸春秋」	昭和41年7月号
	「秋田美人の謎」	新野直吉著（白水社）
	「血液型の話」	石山昱夫著（サイエンス社）
	「電気音響学会誌」	43巻2号

完